

マリモ展開催記

北山 太樹

本年8月22日から10月9日まで、国立科学博物館（台東区）にて「マリモ発見120年 マリモの謎—どこからきたのか？なぜまるいのか？—」と題したミニ企画展を開催した。こぢんまりとした会場ながらも実物のマリモがみせる神秘的な美しさと可愛らしさが受け、夏休みの季節にうまく嵌り、大盛況のうちに閉幕した。この企画展では、釧路市教育委員会若菜勇博士から全面的な監修・協力を得て、マリモの生物地理学的な起源と球状化現象のメカニズムをメインテーマ（図1）に、5つのエリアでマリモ学を展開した。

1. マリモの発見：マリモの命名者、川上瀧彌（1871—1915）を紹介した。和名「まりも（毬藻）」を命名した報文が載る『植物学雑誌』のほか、北海道大学総合博物館が保管する宮部コレクションから同館阿部剛史博士の協力により、日本最古のマリモ標本などを借用することができた。

2. 第1の謎 マリモはどこから来たのか？：かつてさまざまな名前と呼ばれたマリモの押し葉標本を出品するとともに、マリモ類の系統樹、遺伝的多様性、分布などを解説した。その分布拡大に関与した運び屋としてオオハクチョウの剥製を展示し、容疑者がマリモを食べている犯行現場も上映した。

3. 第2の謎 マリモはなぜ丸いのか？：ご本尊として直径20cm級のマリモの生体を展示した（図2）。このサイズのマリモが東京で展示されることは稀で、声を上げて驚く来場者も少なくなかった。マリモは球状化しやすい遺伝的性質を有するが、実際に大きな球状体を形成する群落は阿寒湖に限られている。近年NHKの微速度撮影によりマリモが湖底で1時間に1～2回転の速度でゆっくり回転していることが観察され、阿寒湖に吹く風がマリモの球状化に重要な役割を果たしていると考えられている。その映像も先のオオハクチョウとともにNHK放送センター（渋谷）から映像をお借りして編集し上映した。また、



図1 展示会場入口。地球の丸さとマリモの丸さを組み合わせたグラフィックデザインでメインテーマを表現した。

若菜博士が山形大学から引き取り長年阿寒公民館で保管していた「中澤信午式回転培養装置」（図3）をお借りできたことも幸運で、釧路市教育委員会の尾山洋一博士のチューンナップにより可動な状態で展示された。

4. マリモの未来：若菜博士は、阿寒湖内でマリモがみられなくなったエリアにマリモ群落を復活させるため、「My マリモ」というプロジェクトをすすめている。これは阿寒の小学生が破損マリモの破片を元に作製し、内部にICタグを埋め込んだ再生マリモを栽培し、将来は阿寒湖に放流する事業である。会場では冷蔵庫からMyマリモを取り出し、そのICデータを読み取ることができる体験コーナーを設置した。予想以上の人気があり、混雑に拍車をかけた。

5. 国立科学博物館の取り組み：当館の辻彰洋博士が山中湖の「フジマリモ」について行っている調査研究を紹介した。1956年に小学生であった亀田良成氏が自由研究のために採集し50年以上飼いつづけた「フジマリモ」も、当時の観察日記とともにご本人より出品された。

9月30日に「マリモ講演会」と称し、若菜博士に講演をお願いした。100人の定員を超える申し込みがあり、Myマリモ製作の実演も含む講演「マリモの謎と未来」は大好評となった。講演後、マリモ博士が主人公の写真絵本『マリモを守る』（理論社）を購入された方を対象にサイン会を開いたところ、予想を超える行列ができ、1時間を要したのも嬉しい誤算であった。

およそ1ヶ月半の会期中に来場者は、この規模の企画展としては異例の14万人に達し、あらためてマリモの隠れた人気を認識させられた次第である。この企画展に関わった方全員にお礼を申しあげる。

（国立科学博物館）



図2 阿寒湖産巨大マリモ。

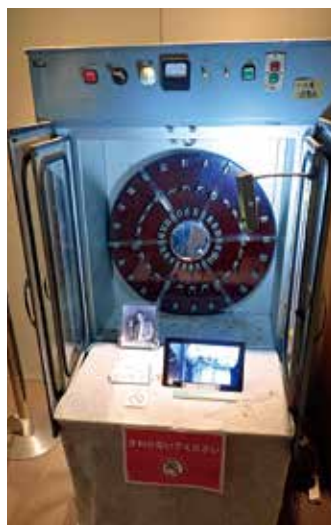


図3 中澤信午式回転培養装置。